

## 減災のススメ

株式会社三浦組 特別顧問 三浦 昭

「火の用心、マッチ一本 火事のもと」は、誰もが知っている標語で、昭和28年（1953年）東京消防庁によって選ばれました。また「火の用心」とは、本多作左衛門重次という人物が戦場から妻へ手紙を送った際に書かれていたようです。現在でも火災予防への簡潔明瞭な言葉として定着しています。

私は小学校5年生の時に子供会活動で5人～6人が組となり、秋から冬にかけて「火の用心、“カチ、カチ（拍子木）”、マッチ一本火事のもと」と夜回りした経験があります。これが私の最初の防火防災に関する活動です。そして30年前から仙台市防災安全協会の一員であり、また泉地区の会長として今春まで8年間活動して参りました。

ところで「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉がありますが、最近では熊本および北海道での地震のように“忘れないうちに、やってくる”のが現実です。私の経験上、天災および人災は、それぞれの要因と条件が重なり揃うことにより発生すると考えています。

また以前に頂いた「地震防災講話ポイント集」の中にも過去の宮城県沖地震の発生間隔等、とても参考になることがたくさんあり、留意点としての「減災」が特に印象的でした。

「減災」とは、災害時において発生し得る被害を最小化するための取り組みですが、状況をイメージし、その対応についてシミュレーションしてみることが大切だと思います。そのために教育・訓練を受けることが必要だと考えています。

私にはこんなエピソードがあります。大学3年の

時に山小屋で、数人でストーブを囲み談笑していました。なぜか急に床から煙が立ちのぼり、すぐに燃え始めました。その状況に慌てて、それぞれが消火に向け、おもしろい行動をしてしまいました。私も近くにあった一升瓶に時間をかけ水を汲み、消えなかった床に水をかけたのです。本来はバケツ等を使用すれば良いのですが、無知であり、訓練していないと、人は思いがけない行動をするものだと、この時に実感しました。

東日本大震災から数年が経過しました。あの時は、私の住む地域も地震の被害には遭いましたが津波の被害はありませんでした。しかし、たくさんの弊社社員が海岸近くで作業に従事しており、安否の確認ができず心が苦しかったのを覚えています。

あの震災の翌年に開催された「第84回 選抜高等学校野球大会」において、石巻工業高校 阿部主将による選手宣誓が印象に残っています。「被災された方々の中には、苦しくて心の整理がつかず、今も当時のことや亡くなられた方を忘れられず、悲しみに暮れている方がたくさんいます。…（中略）その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。」

平成最後の年が明け、この文章を執筆中に、また熊本で震度6弱の地震が発生しました。頻繁に発生する状況の中で、「苦しみ」、「悲しみ」に遭う方が一人でも「減る」ように、日々「減災」に向け、微力ながら地域の方々への支援と協力を心掛けていきたいと思っています。



会長在任当時の仙台市消防出初式



泉地区災害対応研修会に参加した弊社社員